

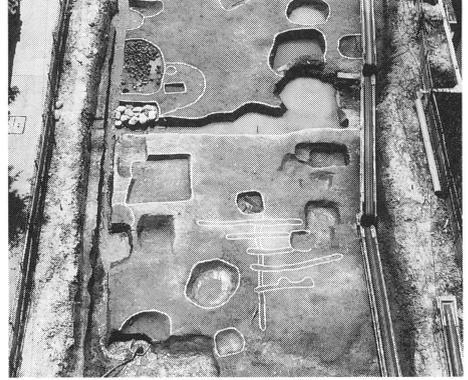
## そと まち 遺 跡 外 町 遺 跡

### 調査の経過

外町遺跡は、尾張平野の中央部を南流する五条川左岸の標高約3m前後の自然堤防帯上に立地し、行政的には、西春日井郡清洲町・新川町の境界付近に位置する。遺跡は中世以降の美濃街道に面しており、北方には清洲城下町遺跡が広がる。

今回の発掘調査は、県道新川・甚目寺線建設に伴うものであり、平成3年4月から8月まで、1890㎡にわたって調査を進めてきた。

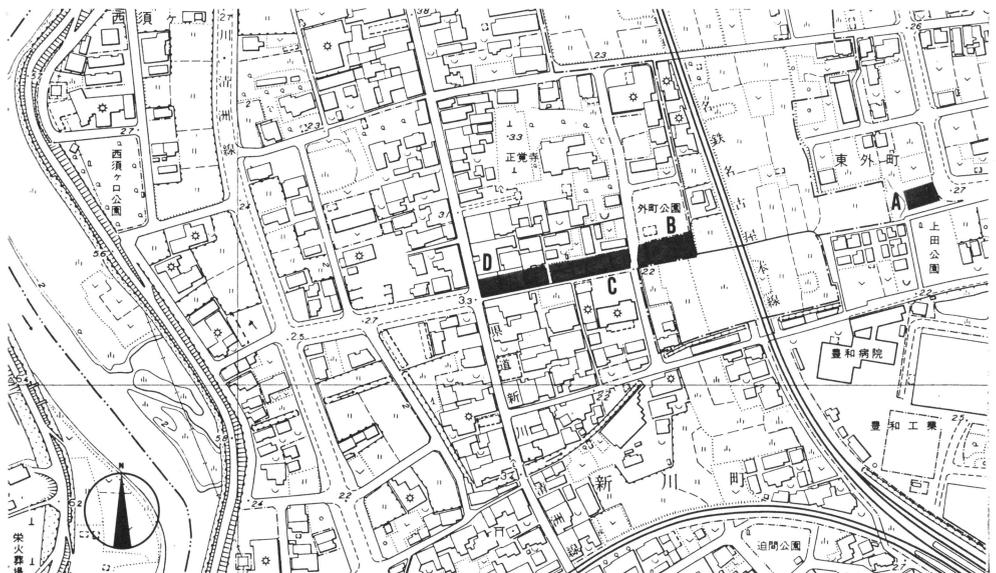
調査は、地下水位の上昇期にあたり夥しい湧水に悩まされ、作業は難航したが、その結果、A区では、城下町後期に属する溝を、B～D区においては、18世紀代を中心とした良好な遺構・遺物の出土をみた。（服部信博）



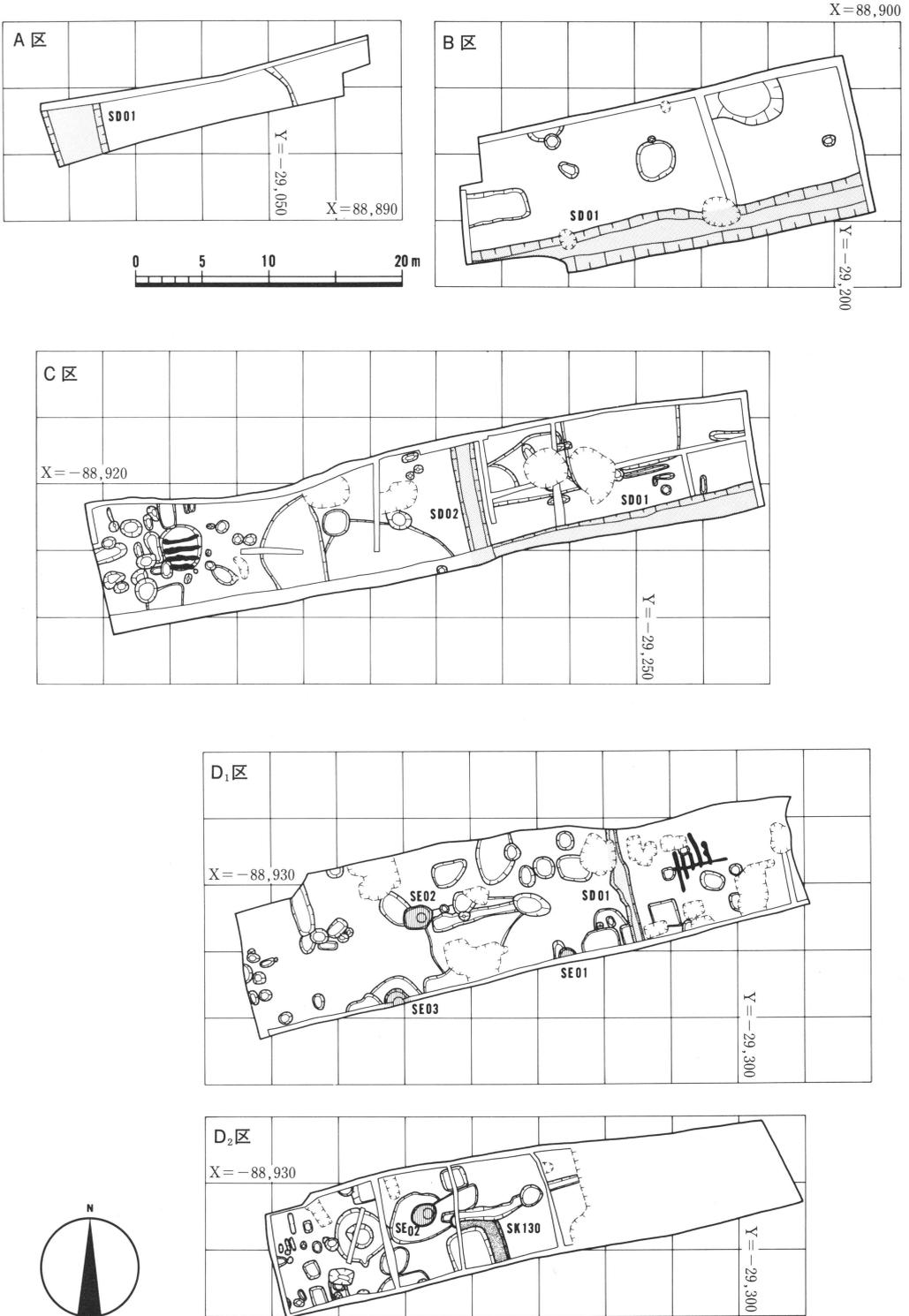
D<sub>1</sub>区東半（東より）



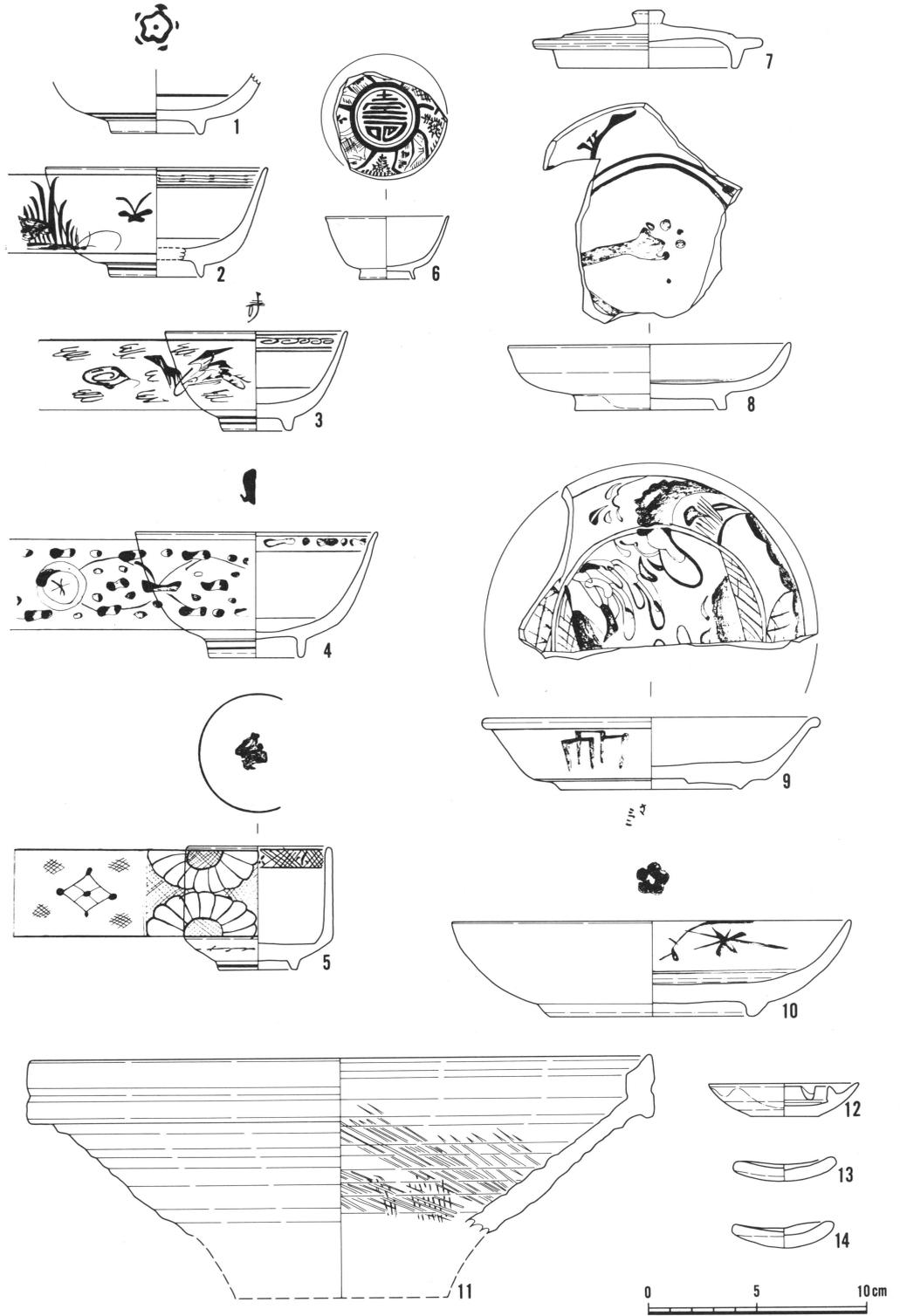
D<sub>2</sub>区全景（西より）



第1図 調査区位置図 1:5000



第 2 図 遺構配置図



第3図 出土遺物

1~10、12はB区SD01  
11、13、14はA区SD01

## 調査の概要

今年度はA～D区の4調査区にわたって調査を行った(第1図)。

### 遺構(第2図)

**A区** 清洲城下町最末期頃(17世紀初頭)と思われる溝1条を検出した。

**B区** 江戸時代後期(18世紀末～19世紀前半)の溝1条・土坑7基・ピット2基を検出した。SD01は、用排水路と思われる。

**C区** この調査区は、攪乱が多く正確に遺構を掴みきることが難しかった。江戸時代後期頃と思われる溝10条・土坑59基を検出した。そのうちSD01・02は用排水路と考えられ、調査区西端では畑の畝と思われるものも検出された。

**D区** 現在の美濃街道に面したこの調査区は、住居跡などの遺構が期待されたが攪乱が多く明確には確認できなかった。上面(D<sub>1</sub>区)では、江戸時代後期頃の井戸3基・溝8条・土坑48基を検出した。そのうちSD01は用排水路と考えられ、調査区東端では畑の畝と思われるものも検出された。上面検出面より約1mの包含層の下の下面(D<sub>2</sub>区)では、新たに江戸時代中頃(17世紀末～18世紀前半)の溝3条・土坑39基・ピット2基を検出した。特にSK130では、山茶碗の破片が出土し室町時代の土坑であることが確認された。

### 遺物(第3図)

出土遺物としては、江戸時代後期を中心とした瀬戸・美濃産の陶磁器類が大多数を占めている。1～4は染付けの碗、5は染付けの筒型湯呑碗、6は内面に模様をもつ小碗、7は灰釉のかかった陶器の蓋、8～10は染付けの皿、12は鉄釉のかかった灯明皿である。

また、A区では清洲城下町最末期頃の遺物が出土しており、11は備前焼の播鉢、13・14は土師器の皿である。

その他、甕・蓋・杯などの須恵器も、表土や包含層、遺構内から出土している。

### まとめ

A区では、清洲城下町最末期頃の溝が確認されており、北方に広がる清洲城下町が拡大膨張して外堀の外側にも町を形成していた可能性が高いと思われる。

B区～D<sub>1</sub>区では、江戸時代後期頃の町の様子を伺うことができる。D<sub>1</sub>区SD01以西は井戸を検出しており居住地と、D<sub>1</sub>区SD01以東C区SD02以西までは畝を検出しており畑地と、C区SD02以東B区までは田地であったのではないかと考えられる。

D<sub>2</sub>区では、江戸時代中期には人々の住んでいた形跡がみられるが、約1mの盛土が18世紀後半に行われているようであり、『清洲町史』にみられる五条川瀬違え(1794)と時期が一致しており、この時期この地域に瀬違えに伴う町割りの再編という人為的な造成があったことが想定される。

(小嶋廣也)